

令和7年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表その1

「評価」及び「総合評価」の評定基準  
 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった

<p>本年度の重点目標① 多様な進路に応じた人材育成</p> <p>一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、学生個々の進路やニーズに対応した教育を行い、生涯にわたる社会人・職業人としてのキャリア形成を支援する。</p>	<p>総合評価 A (十分達成できた)</p>	<p>(所見)                  希望進路の実現に向け、「農大進路指導計画」に基づき、進路希望調査、資格取得希望調査及び三者面談を実施し、進路希望を把握するとともに、県の農業法人協会と連携した就農相談会や進路研修「ようこそ先輩！」等を実施し、進路意識の向上を図った。また、進路未決定の学生に対してはその都度個別面談を実施するとともに、徳島公共職業安定所(駅のハローワーク)等と連携し就職相談を実施した。卒業時点での進路決定率は95.2%であった。卒業生21名の進路先については、自営・就職就農7名、農業団体・農業関連企業等への就職6名、その他企業等への就職3名、公務員3名、進学(4年制大学編入)1名、未定1名となった。                  4年制大学への編入については、2年次生1名が受験し、1名が合格した。また、1年次生には希望者が2名いるため、引き続き複数の教員で役割分担を行い、希望大学の学力試験、論文、面接等の個別対策を行う必要がある。                  行事等の集団活動に関しては、伝統行事である農大祭、四国農学連スポーツ大会等を実施した。各行事とも学生自らが企画し、円滑な運営に務めた。また、模擬会社「そらそうじゃ」の校外活動として、県内では、食育推進全国大会やSunSunナイトマーケット、ヴォルティス学園祭に出店し、県外では神戸市で阪急オアシス店舗前販売を実施するなど、企画・販売の実践経験を積んだ。これらの集団活動や校外体験活動は学生の実践的コミュニケーション力の向上や、主体的な課題発見、問題解決能力の育成に貢献するものである。次年度も学生が成長を実感できるような取り組みを継続し、さらなる内容の充実を図る必要がある。                  以上の観点から、「多様な進路に応じた人材育成」に係る総合評価をA(十分達成できた)とした。</p>
--	---------------------------------	--

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
① キャリア プラン ニング(将 来設計) 能力 の育成	<p>1 進路希望調査、面談、進路相談会等のキャリア教育を通じて、働くことの意義や職業観を身に付け、1年次より進路について主体的に考え、明確な目標を持てるように支援する。</p> <p>2 徳島県農業法人協会、公共職業安定所等と連携したキャリア教育を推進する。</p>	<p>・三者または二者面談の実施(年3回以上)                  ・各種キャリア教育の実施による進路目標の決定(1年次中に90%以上)</p> <p>・農業法人と連携した就農相談会等の交流学习の実施(各学年1回以上)                  ・公共職業安定所等と連携した就職ガイダンスの実施(各学年1回)</p>	<p>進路指導を踏まえた面談を年間3回(4月・5月・1月)実施した。また適宜個別面談を実施した。学校評価アンケートの「三者面談や個別面談が、コース選択や進路決定に役立った」という項目に、1年次生の肯定的評価は95.7%であった。                  キャリアプランニングに向けて、就職候補先である農業法人等との交流(農業法人説明会、農業法人バスツアー、進路研修「ようこそ先輩!」)及びハローワーク研修を実施した。                  1年次生の進路目標決定率(12月19日時点)は、96.0%であった。具体的な就職希望先または進学希望先の決定率は87.5%であった。</p> <p>農業法人との交流等のキャリア教育が進路選択や進路実現にとって貴重な経験となることを事前に十分指導するとともに、農業法人協会との連携により、県内農業法人と各学年1回(1年次後期及び2年次前期)の就農相談会を開催した。                  2年次生対象の相談会に参加した、19法人のうち6法人に6名の就職が内定した。                  各学年1回(1年次後期、2年次前期)、公共職業安定所と連携した就職ガイダンスを実施した。事後指導として適宜個別面談を実施し、キャリア教育が進路選択や進路実現に直結するよう支援した。</p>	A	A	<p>進路指導担当者や農業法人との交流・研修会等を充実させ、2年次当初から就職活動に取り組めるように、進路指導に努める。</p> <p>引き続き、農業法人協会等との連携を強化するとともに、公共職業安定所のもつ機能を最大限活用し、学生の就職活動を支援する。</p>
学校関係者委員の意見		<p>現在は一人での就農が難しい時代でもあるため、農業法人と連携しながら経験や先進地の新しい技術を学ぶことが重要だと思う。また、安定した供給のためには生産力の向上や規模の確保も必要なので、学生や若い就農者が学びやすい環境づくりを進めながら、楽しむ農業を深めてもらいたい。</p>				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
② 個々のニーズに基づいたマンツーマン指導の充実	1 学生に基礎的・基本的知識を確実に習得させ、学力向上を図る。	・職員の授業改善に係る肯定的評価(90%以上) ・講義で行われる教養科目・専門科目、それぞれの不認定者数(10%未満)	職員の授業改善に対する学生の肯定的評価の10項目平均値は98.1%であった。教養科目・専門科目につき、本試験で十分な点数を得られなかった学生に対し再試験や補講等の個別指導を行った結果、それぞれにおける不認定者数は、1年次生は教養科目3名(0.6%)、専門科目7名(2.8%)、2年次生は教養科目0名(0%)、専門科目4名(0.9%)となった。	A		学生の学習に対する興味喚起及び学習意欲の向上を支援する。
	2 編入学希望者には、「進学対応カリキュラム」により、学力向上を支援する。特に編入学試験等で必要となる英語・化学・生物・小論文・口頭試問においては、補習や個別指導を行う。	・編入学を希望する学生の合格決定率(60%以上)	4年制大学進学希望の学生1名に対し、個別に専門科目の補習や論文作成、口頭試問対策、面接指導を行った結果、愛媛大学への編入学試験に合格した。	A		個別指導を充実させるとともに、自主的に学習を行う意欲を向上させる。
	3 農業法人との交流会、履歴書作成指導等の実施により、1年次の早期から就職活動に向けた意欲の醸成を図る。	・農業法人との交流会からインターンシップにつながった学生の割合(20%以上) ・履歴書等の作成指導(1年次1月より開始し、適宜)	農業法人との交流会「農業法人説明会」を10月に開催した。次のステップである企業説明会やインターンシップには19名の学生が参加した。参加率は79.2%であった。1年次の12月に「ハローワーク研修」を実施し、就職活動の始め方やその留意点(求人票の見方、履歴書の書き方等)について指導を行った。	A		仕事への適性を把握するためにインターンシップは有効であるため、より多くの学生が参加するよう指導を行う。履歴書作成については、特に重要な志望理由や自己PRについて作成指導をするとともに、企業研究を十分行うよう指導する。
	4 学生のニーズに対応した資格取得講座を開催し、資格取得を支援する。 本年度は、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、農業技術検定、フォークリフト、わな猟免許、土壤医検定、英語試験、パソコン検定、家畜人工授精師、家畜商に係る講座を開催する。	・各講座の受講率(1、2年次を通して学生の80%以上)	英語試験対策講座、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、農業技術検定、フォークリフト、狩猟免許、土壤医検定、パソコン検定、家畜人工授精師に係る特別講義を開催した。 学生の95.5%※が講座を受講した。 ※受講したと認定された者の数。 1年次生の講座受講率は、95.7%。 2年次生の講座受講率は、95.2%(1年次から通算)。	A	A	学生の資格取得希望を調査し資格取得講座の設定に活かす。
	5 「就職・大学編入試験受験報告書」や「就職試験面接指導マニュアル」など、各種資料を活用し、各々の進路に合わせた個別のきめ細やかな面接指導を行うとともに、進路未決定者に対しては、適宜進路面談を実施する。	・進路指導に対する学生の肯定的評価(80%以上) ・年度末の進路決定率(90%以上)	進路実現の重要性や働くことの意義等について、個別面談において1年次から意識付けを行った。 就職試験受験報告書などを活用し、各学生の就職試験前には適宜きめ細やかな個別指導を行った。 2年次の進路指導に対する肯定的評価が100%であった。 卒業時点での進路決定率は、95.2%であった。 進路指導評価、進路決定率ともに数値目標を達成した。	A		引き続き、面接等による個別のきめ細やかな進路指導を実施するとともに、進路未決定者に対しては、適宜進路面談を実施し、速やかな進路決定に向けたサポートを行う。
学校関係者委員の意見		大学の編入制度があるのは素晴らしいと思う。専門的な知識を身につけた後に徳島で後継者の育成をするような立場になって欲しい。また、農業が楽しいだけでなく、収益が上がる経営面まで学び、しっかり稼げる力を育ててほしい。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
③ 高度情報化への対応と コミュニケーション能力 並びに問題解決能力 の育成	1 基本的なパソコンスキルを習得して、「Microsoft Office」の各ソフトウェアを活用できる能力を育成する。 授業内容及び機械作業等の動画教材を活用し、予習、復習が行える学習環境を提供する。	・ワード、エクセル、パワーポイントを活用できる学生の割合(80%以上) ・情報教室にて動画教材の閲覧機会の提供(常時)	「ワード、エクセル、パワーポイントを活用し、学習内容や体験活動についてまとめることができた。」という項目に肯定的な回答をした学生が、1年次生では82.6%、2年次生では100%であった。 情報教室にて動画教材の閲覧を常時実施している。	A	A	引き続き「ワード、エクセル、パワーポイント」を習得・活用できるよう指導に努める。 引き続き教材の閲覧環境を維持し、周知・活用に努める。
	2 プロジェクト学習における計画段階から調査・研究に至る一連の取組や、それらの成果や課題をまとめ、発表する機会を設定することにより、正確かつ的確な情報伝達能力、並びにプレゼンテーション能力を育成する。	・プロジェクト学習の進捗・成果に関する発表の開催(年間3回以上)	プロジェクトの計画発表、中間発表、成果発表の練習も兼ねて、コース内で進捗状況を発表する機会を3回以上設け、プレゼンテーション能力の向上に努めた。 成果発表会における職員による評価が10点満点中7点以上の学生は21人中20人で、95.2%であった。学校代表の学生2名が中国四国ブロック大会で発表を行ったところ、うち1名がブロック代表3名中の1名として選出され、全国農業大学校等プロジェクト発表会に出場した。	A		プロジェクト学習の計画からとりまとめに至る各段階での指導・助言を充実させる。
	3 ワークショップやグループ活動等、知識を相互作用的に活用する機会を授業や実習に取り入れ、言語活動を活性化させることにより、思考力・判断力・表現力等を育成する。	・コース実習においてワークショップやグループ学習等の時間の確保(年間20時間以上)	実習前の座学や情報収集活動などを、農業生産技術コース、6次産業ビジネスコースとも30時間程度確保した。 特に各種発表会の準備の際に発表の仕方や資料の提示方法などの検討・指導を行い、言語活動の充実を図った。	A		引き続き授業や実習において言語活動を適宜活用し、思考力、判断力、表現力の育成に努める。
学校関係者委員の意見		少子化で生徒の数は大きく減少し、学校教育のあり方も変わっていくので、これからはコミュニケーション能力や実践力を身につけることが大切である。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
④ 体験的な学習活動による実践力の育成と社会性の醸成	1 模擬会社「徳島農大そらそらじゃ」の活動において、定例会(業務担当者会)を定期的に開催し、商品開発や販売技術向上について協議する場を設けるなど、学生主体の運営体制を支援する。	・定例会や役員会の定期的な開催(毎月1回) ・商品開発や販売技術向上に対する学生の肯定的評価(80%以上)	徳島農大そらそらじゃの活動において、夏季休暇期間を除き定例会および役員会を月1回以上の頻度で開催するように促すとともに、商品開発や販売技術向上などの助言を行うなど学生が主体となって運営体制を担えるように支援した。 その結果、「商品開発や販売技術の向上」に関する学生の肯定的評価は97.7%であった。	A	A	今後も、学生主体の運営体制が図れるように支援する。
	2 模擬会社「徳島農大そらそらじゃ」として各種販売イベントに参加し、仲間とともに活動する体験を通して、責任感や協力を重んじる姿勢を、農業大学の文化として定着させる。	・責任感や協力に関する学生の肯定的評価(90%以上)	徳島農大そらそらじゃとして食育推進全国大会、SunSunナイトマーケット、ヴォルティス学園祭、阪急オアシス店舗前販売など、県内外のイベント等に計5回出店、校内ロビーでは、通常の開市に加え歳末大売出しを実施した。こうした経験を積む中で、自分の役割を果たす責任や仲間との協働意識の醸成につながっている。 その結果、「責任感や協力」に関する学生の肯定的評価は97.7%であった。	A		引き続きイベントへの出店、校内販売の充実を図り、責任感や協力を重んじる姿勢を養う。
	3 模擬会社「徳島農大そらそらじゃ」の活動を周知するため、ロビー市の販売品や目玉商品などの情報提供やイベント出店報告などを、農大ホームページやInstagramを活用して積極的に発信する。	・農大ホームページやInstagramを活用した情報発信(年15回以上)	模擬会社徳島農大そらそらじゃの活動周知のため、農大ホームページおよびInstagramを活用し、販売品や大売出しの告知、イベント出店報告など約25回の情報発信を行った。 加えて、石井CATVの番組内で、徳島農大そらそらじゃの取り組みや農大祭について紹介するなど情報発信に努めた。	A		今後も、ホームページやSNSを積極的に活用して、迅速な情報提供を通じてさらなる周知徹底に努める。
	4 「農業・6次産業体験学習」の実施に際し、農業会議とも連携しながら研修先の支援のもと、職業体験を通じて実践力と社会性を育成する。 事前に学習のねらいや受講の心構え等の説明会を充実させ、意欲と目的をもって学習に臨むよう指導助言を徹底する。	・実践力や社会性の向上に関する学生の肯定的評価(90%以上) ・受け入れ先の意見回答者からの肯定的評価(80%以上)	農業・食品関係の法人、農業士各位の協力により体験学習が実施できた。知識や技術等実践力、あいさつや言葉遣い等社会性の向上について、学生全員(100%)が「大変そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した。 あわせて、教職員の93.3%が「担当学生の実践力や社会性が向上したと感じた」と回答した。 研修開始前、直前及び実施後に説明会を開催し、受講の心得や自己目標を明確にすること等意識の醸成につとめたところ、研修先からアンケート回答者12名中、11名(91.7%)から肯定的評価を得られた。	A		引き続き事前の目標明確化や意識の醸成、社会のルール等について指導を行う。
	5 「農業・6次産業体験学習発表会」を開催し、学生が感じた成果と課題を整理して発表することで、学習内容の強化と定着を図る。	・視覚資料等を活用した体験学習発表会の開催(年1回) ・発表会で基準点以上の評価を得る学生の割合(90%以上)	発表会に向け、体験学習の目的、学習内容等について、分かりやすいプレゼンテーション資料等の作成を指導し、7月の発表会では、整理されたものを視覚的に伝えることができていた。最終評価では、学生の90.5%が80点以上の得点を得ることができた。	A		発表内容の取りまとめについて個別に指導助言を行い、発表力(プレゼン力)を育成する。
	6 校外研修等を通じて、先進的な取り組みを調査研究することにより、幅広い視野と地域振興につなげる実践力を養成する。	・研修時間の設定(12時間[6時限]以上)	農業生産技術コースは、種苗会社の生産現場や研究の取組を視察するとともに、量販店における販売状況等を調査し、14時間の研修時間となった。 6次産業ビジネスコースは、京都においてインバウンド需要及び商品開発について学習するとともに、インバウンド等商品開発、6次産業化に関するマーケティング調査を行い、12時間の研修時間となった。	A		学生の意向を勘案し、継続実施に努める。
学校関係者委員の意見	農大で開発した商品をイベント時の販売だけでなく、一般の人が普段でも購入できるよう産直市など地域店舗での常設販売を検討して欲しい。こうした取り組みは、地域住民への周知や広報活動にもつながると思う。					

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
⑤ 特別活動・課外活動の活性化による自主・自律性の醸成と仲間づくり	1 学生生活を活力あるものとするため、学生自治会活動、四国農学連行事などの自主的運営を支援する。	・学生自治会活動等の成果の展示(農大祭ほか適宜) ・他県の学生との交流(適宜)	学生自治会が主体となって農大祭を準備・実行した。例年行っている農産物及び加工品の販売に加え、今年度は新たに規格外野菜の販売を実施した。昨年度の反省から、お客様のスムーズな動線確保のため、レジの数や配置について改善した。 また、四国農学連行事では、役員を中心として大会運営に携わるとともに農学連スポーツ大会の全種目に参加した。その結果、バドミントンは優勝、卓球は準優勝であった。さらに、農大での取組目標や自身の農業に対する思いを発表する意見発表会では、大会運営を通じて他校と交流を深めることができた。	A	A	次年度も事務局担当校と意見交換を行い、引き続き四国農学連行事の運営が円滑に進むよう支援する。
	2 学校行事(校外研修、農大祭、収穫祭、四国農学連スポーツ大会等)について、仲間が共同して企画、運営することを支援し、行事を成功させる。	・行事实施に関する学生の肯定的評価(80%以上)	学生自治会主催の校内行事として、農大祭、新入生歓迎ボウリング大会、収穫祭等を、四国農学連主催の行事として、スポーツ大会、意見発表会を学生の企画運営により成功させた。 事後アンケートでは、「学校行事は充実したものになった」の肯定的評価が97.7%、「自治会活動や学校行事は、仲間作りや連帯感を高めるために役立った」の肯定的評価が100%であった。	A		学校行事は、学生生活を豊かにし仲間づくりの場ともなる重要な活動であるため、学生の主体性を尊重しつつ各行事の課題点を改善し、更に充実するように指導する。
学校関係者委員の意見		言及なし。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
⑥ 積極的な教育活動の改善並びに学校運営の改善	1 課長会、コース会等を定期的かつ効率的に実施し、学生指導をはじめ、危機管理、コンプライアンスなどに関する情報交換や研修を行うことで、教育課題の共通認識、指導情報の共有化、並びに教職員の資質向上を図る。 また、就農等に向け効果的かつ実践的なカリキュラムの編成を行う。	・課長会等の開催(月1回以上) ・コース会の開催(随時) ・学校運営や教育指導に関する研修会等の開催(月1回) ・次年度のカリキュラム編成に関する検討会の開催(年2回)	課長会等を毎月月初めに開催し、学生指導に関する協議や研修・行事等連絡事項の速やかな周知、情報の共有化を図る一方、座学や実習等運営上の課題や改善等については、各校務担当会議やコース会議等を適宜に開催し、早期の課題解決、改善を図った。 また、始業前の朝礼にて伝達事項を確認したり、スケジュールを職員間で共有管理したりすることで学生への指示事項等を徹底し、共通理解に努めた。 今年度は、「コース内における情報共有」に対する教員の肯定的評価は92.3%となっている。 カリキュラムの編成に向けてはより効果的な内容となるよう、職員や学生への事前アンケートとともに、職員については個々に意見を聴取するなど、学生及び職員の意見を十分把握し、検討会(2回)を経て、次年度のカリキュラムに反映した。	A	B	学生の学習・生活状況や学校運営に係る事項などの情報交換・協議を随時に行い、より効率的かつ効果的な学校運営を図る。 カリキュラムについては、指導内容や指導方法など定期的な点検を行うとともに、学生ニーズや就職環境に応じた新たな講座の開設等、魅力あるカリキュラムづくりに務める。
	2 定期的に、学校教育目標に基づく具体的な取組のヒアリングを実施し、指導の進捗状況や適切さを評価する。	・各担当教員に対するヒアリングの実施(年2回) ・学校評価等の実施(年2回)	各担当教員に対し、指導の進捗状況等について、5月と10月の2回、職員に対する面談を行った。 教員を対象とした学校評価アンケートでは、「課長会等での積極的な情報発信や教育活動及び学校運営上の諸問題の解決」に関する肯定的回答が100%となっている。 学校評価については、6月に学校評価に係る活動計画検討会の開催、3月には第三者評価委員会を開催し、取組に対する意見・評価をいただくことにより、次年度に向けて指導内容や学校運営に反映する。	A		引き続き、学校評価アンケート等の結果を踏まえた教育目標の設定に努める一方、職員間の更なる意思疎通を図り、職員一人一人が意欲を持って学校運営に参画する意識の醸成を図る。
	3 先進的な農業技術や6次産業化など高度化する農業経営に対応した教育を提供するための学習資材の拡充及び既存設備の適切な更新により、学習環境の改善を図る。	・学習資材等の導入検討会の開催(年2回) ・既存設備の点検等の実施(随時)	先進的なドローン防除や自動運転トラクター等スマート農業技術の習得については、機械が高額な上にオペレーター確保も必要であるなど整備は難しく、農機具メーカーへの委託による講義・実習にとどまっている。 なお、導入可能な機材等については、職員による導入検討会やセンター内における物品購入業者選定委員会において必要性を十分協議しつつ整備を進めている。 また、既存設備については各科目担当や備品担当が随時に行う点検に加え、一部の機材については定期的に専門業者へ点検を委託することにより、良好な状態を維持している。	B		引き続き、先進的な農業技術等に対応した学習資材の拡充を図る一方、高額なものについては国の事業を活用し導入整備を進める。 また、既存設備については適切な整備・点検を行うなど良好な学習環境を維持する。
	4 高等学校との連絡・連携を密にし、学生の生活指導や教育活動の改善に活かす。	・高等学校への訪問(年1回以上) ・電話等による学生指導に関する情報交換(適宜)	今年度も7月から8月の間に全高校を訪問し、各学校の生徒事情や進路に関する意向等状況把握に努めた。また、農業系高校への進路状況等に関して訪問や電話による情報収集を行った。	A		高等学校との更なる連絡・連携を図り、進路や学生指導に関する情報交換を行う。
学校関係者委員の意見		言及なし。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
⑦ 心の通う 人間関係 を構築する 能力の 素地養成	1 教職員の人権意識を啓発するために人権研修を行う。また、いじめなどの問題を早期発見するための研修を行い、対応能力を高める。	・学生の人権意識を高めるよう配慮した指導の実施における教職員の肯定的回答(90%以上)	教職員対象の人権研修を受講するなど、人権意識の高揚に努めた。 学校評価アンケート「授業、実習や行事を通じて学生の人権意識を高めるよう配慮した」に対する教職員の肯定的回答は93.3%であった。	A	A	引き続き、職員に対する研修を実施する。
	2 学校生活において問題を抱えていると思われる学生との面談を通して、心理的な問題等を早期に発見し、組織的に対応する。	・人権を尊重する仲間づくりに対する学生の肯定的回答(80%以上)	学校の教育活動全体を通じて、人権を尊重する意識の涵養に努めた。 学校評価アンケート「人権を大切にしている仲間づくりができた」に対する学生の肯定的回答は100%であった。	A		日頃から学生の様子を観察し、必要に応じて個別面談等を実施するなどして、人権尊重の意識付けを行う。
	3 学生の悩みを解決するために、学生、家族等、教職員による三者面談を開催する。学校と家庭が連携し、協働する体制を構築し問題解決にあたる。 また、スクールカウンセラーを配置し、カウンセリングを受けられる体制を整備する。	・三者面談の実施(年1回) ・学校生活に関する調査の実施(年2回) ・いじめをはじめとする学生生活上の問題の早期発見、必要と思われる学生全員への教育相談の実施(適宜) ・スクールカウンセラーの配置(令和7年6月から令和8年2月まで) ・スクールカウンセリングに関する教職員研修の実施(年2回以上)	1年次生及び2年次生に対し、三者面談をそれぞれ1回実施した。 また、学校生活に関する調査を2回実施し、要注意回答をした学生に対しては、個別面談を実施した。 スクールカウンセラーを令和7年6月から令和8年2月までの間に配置し、延べ6回のカウンセリングを実施した。また、悩みを抱える学生対応についての職員研修を1回と、学生・職員の参加する研修を1回実施した。	A		引き続き、三者面談、学校生活に関する調査を実施する。気がかりな点について職員間で情報を共有し、きめ細かな指導を行う。 スクールカウンセラーも引き続き配置し、学生が相談できる機会を確保する。
学校関係者委員の意見		言及なし。				

令和7年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表その2

「評価」及び「総合評価」の評定基準  
 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった

<p>本年度の重点目標② 地域農業への寄与</p> <p>農業体験学習、模擬会社の運営、6次産業化への取り組みなどを通じて、社会との連携を深め、総合的な指導体制のもと、幅広い経営能力を養成するとともに、地域農業等に寄与する。</p>	<p>総合評価 A (十分達成できた)</p>	<p>(所見)                  農業生産技術コースでは、多様な農産物(水稻、野菜、果樹等)栽培管理や産業動物の飼養管理技術を習得するとともに、地域農業の課題(生産)に対応するためのプロジェクト研究に取り組んだ。また、6次産業ビジネスコースでは、農産物等の栽培管理に加え、加工技術を習得するとともに、地域農業の課題(加工・販売)に対応するためのプロジェクト研究に取り組んだ。                  両コースの学生とも、農業体験学習や「あるでよ徳島」、SunSunナイトマーケット等への出店などの学外活動を通じて、地域の実践者から直接的に「生の声」や「実際の作業指導」を受けた。これにより、新たな視点に加わり、ともに将来の経営者として不可欠な地域連携の重要性を深く理解した。                  6次産業化への取り組みでは、6次産業ビジネスコースの学生が中心となり、加工品の試作・試食アンケート・改良を重ね、実践的な商品開発に取り組んだ。また、模擬会社「そらそうじゃ」の運営や、農大ロビー販売、農大祭等での試食・販売活動を通じて、消費者ニーズの把握、世代を超えたコミュニケーション能力の向上、および完成度の高い商品作りを実現した。                  これらの活動や学校生活の様子などは、農大新聞「GoGo農大」、Instagram、センターニュース、石井CATVなど、多様な媒体で紹介した。これにより、地域農業や6次産業への貢献を図るとともに、農業大学校自体の広報を効果的に行った。                  以上の活動実績に基づき、「地域農業への寄与」に関する総合評価はA(十分達成できた)とした。</p>
--	---------------------------------	--

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
① 栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成(農業生産技術コース)	1 学生が主体的にプロジェクト課題解決学習に取り組むとともに、日々の栽培管理は学生同士が協力して実践する。また、活動の成果は農業者をはじめ広く情報発信する。	・プロジェクト課題で生産性向上、技術改善に取り組む学生の割合(50%以上) ・農大ホームページ、センターニュース等による情報発信(適宜)	全ての学生(100%)が主体的に生産技術の向上や地域の課題解決につながるプロジェクト課題に取り組んだ。 また、優秀なプロジェクト成果については、農大祭やオープンキャンパスでのパネル展示やCATVでの放送などを通じて、情報発信に努めた。	A		引き続き、学生自らが課題を設定し、自主的にプロジェクト課題解決学習に取り組める環境を整備する。
	2 「農大祭」や「ロビー市」等で販売する商品の栽培方法や機能性等について、コース実習や校外研修等を活用して、十分な知識を習得させる。	・農作物生産、販売において知識習得や技術向上に取り組む学生の肯定的評価(50%以上)	農大祭に向けては、7月に作付計画を作成し、生産体制として2年次生全員が生産品目担当として活動することにより、23品目の青果物等を販売した。また、柑橘(スダチ・みかん)の詰め放題や規格外野菜の販売などのイベントを通して、農大のPRや農業への理解浸透を図った。 校外研修では、香川県善通寺市の(株)中国四国クボタを訪問し、自動運転トラクタや畦畔草刈り機などスマート農業技術について理解を深めた。 学生の自己評価では、「栽培及び販売活動等を通して、様々な作物に関する知識、技術が向上した」との回答が100%であった。	A	A	近年、猛暑などの異常気象により、作物の品質低下や栽培管理上の問題を引き起こしており、研究テーマにこれらの課題に対応した技術開発や新品種導入などを検討する。
	3 徳島県立農林水産総合技術支援センターや農業団体等の関係機関との連携を深め、先進的な栽培方法等について調査、研究する。	・試験研究成果、スマート農業技術及びみどりの食料システム戦略に即したプロジェクト課題に取り組む学生の割合(50%以上)	コース内の全プロジェクト課題のうち、スマート農業技術に関する課題はなかったものの、みどりの食料システム戦略に掲げる環境負荷低減技術や高い生産性を維持する生産体系に関する課題の割合は76.9%であった。	A		引き続き生産力や品質の向上、スマート農業を始めとする省力化の推進及びみどりの食料システム戦略に寄与する課題の取組を指導する。
学校関係者委員の意見		他県ではミカンなどの生産を目指す人を普及員が支援している。徳島においても、就農する若者が、すだちやさつまいもなどのブランド品目を継承できる仕組みができれば、地域貢献や担い手確保につながると思う。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
② 農作物の付加価値販売につながるビジネススキルを身に付けた人材の育成(6次産業ビジネスコース)	1 プロジェクト活動において、地域課題を踏まえた6次産業化を伴う農業ビジネスモデルを研究・実践する。	・6次産業化ビジネスモデルの研究に取り組む学生の割合(80%以上)	全ての学生が、商品開発に向けた加工、コストを勘案した価格設定に取り組み、その成果を卒業論文にまとめた。	A	A	地域課題を踏まえた6次産業化に取り組み、経営感覚を身に付け、プロジェクト活動を更に充実させる。
	2 学内外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や市場ニーズを把握、分析し、商品開発や販売戦略等に活かす。	・商品開発のヒントや販売手法を学ぶ学習機会の提供(年3回以上)	神戸市の阪急オアシス、県物産観光交流プラザ「あるでよ徳島」などの県内外の展示販売イベントに参加するとともに、農大祭や歳末大売り出しで消費者ニーズの把握や、東京や京都でのインバウンド向け商品の市場調査などの学習機会を設けた。消費者とのコミュニケーションから価格や量、パッケージ、PR方法など多くのことを学び、商品開発に役立てた。	A		市場ニーズを意識したプロジェクト活動を増やし、高付加価値化に向けた実践活動を実施する。
	3 プロジェクト活動に取り組む過程で、プロジェクトマネジメント、ブレインストーミング、PDCAサイクル等の課題解決の手法を習得させる。	・農作物の付加価値化に向けた様々なビジネス手法の活用とプロジェクトの課題解決に取り組む学生の割合(50%以上)	プロジェクト活動の計画や実施の過程で、様々なアイデアを検討し、適切な結論を導き出すことができたとする学生は、成果発表やアンケート結果から94.7%であった。	A		引き続き、最適な手法で課題解決ができるよう指導する。
学校関係者委員の意見		言及なし。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
③ 地域農業への寄与のための体制づくりと、研究成果や学生活動に係る積極的な情報発信	1 六次産業化研究施設を活用し、加工品開発に取り組み、地域社会へ発信する。	・販売まで至った加工品の開発(10品以上)	六次産業化研究施設等を活用して加工品開発に取り組み、11品目を開発して農大祭などで販売した。 加工品:トマトソーセージ、唐辛子サラミ、シャインマスカットタルト、さつまいものチーズケーキ、和紅茶、金色茶、ししとうグリーンカレー、唐辛子ピザ、阿波すず香マーマレード、完熟すだちゴールドデンシロップ、アイス(和紅茶、桃、イチゴヨーグルト、阿波すず香、さつまいも)など	A	A	引き続き、開発した商品を校内外のイベント等で販売するとともに、インスタグラム等で地域社会へ発信を強化する。
	2 学生の研究や学校生活、「そらそうじゃ」の活動状況など定期的な広報等を作成する。 また、農大HPその他の情報発信ツールを活用して農業関係機関、関連企業、高等学校だけでなく、広く一般に対して積極的に情報発信を行う。	・「GoGo農大」の発行(年間12回以上) ・HPの更新(適宜) ・県アカウント「農の宝島!!とくしま」による成果の情報発信(適宜)	教育活動に関する広報紙を12回作成・公開した。 農大HPについては、軽微な修正を含め約25回の更新を行い、常に最新の情報を地域社会へ発信した。 農大に特化した情報をより多く発信するため、令和7年7月よりInstagramアカウント「徳島県立農業大学校」の運用を開始した。開設以降、学生の実習や講義、「そらそうじゃ」の活動など、約50回の投稿(情報発信)を行った。	A		引き続き、広報紙の発行、農大HPの更新並びにInstagram「徳島県立農業大学校」からの情報提供を行い、積極的な情報発信を行う。
	3 本校の教育活動に関して積極的な情報発信・広報活動を行い、未来の徳島県農業を担う意欲と活力に満ちた新入学生を確保する。	・高校への訪問、電話案内の実施(年2回以上) ・高校でのガイダンス参加者の肯定的評価(80%以上) ・オープンキャンパスの実施(年2回)	高校訪問1回、高校への電話案内及び資料送付1回、学生募集説明会及びオープンキャンパス2回、進路ガイダンス(高等学校での模擬授業を含む)を15回実施した。アンケートによる参加者の肯定的評価は95.8%であった。 オープンキャンパスでは、学校施設の案内の他、農業生産技術コース、6次産業ビジネスコースに分かれ体験学習を実施した。 県内の高等学校における進路ガイダンスでは、座学と実習が結びついたカリキュラムの特徴を紹介するとともに、模擬授業では花き園芸をテーマに授業を実施した。高校生及び高校教諭等の農大見学も適宜行うとともに、学生らがテレビ、ラジオ番組への出演等を通して学校のPRに努めた。	A		引き続き、積極的に入学生の確保に努める。 農業教育の専門校としての特色紹介に注力する。
学校関係者委員の意見		農業法人協会では、複数の高校に対し農業法人説明会を実施している。この時、農業大学校とも連携したアプローチができるのではないかと考えている。				